長谷川四郎全集　第七巻

長谷川四郎全集第七巻

一九七七年一月五日印刷
一九七七年一月一〇日発行
著者長谷川四郎
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二-一-一二
電話東京二五五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）
振替東京六-六二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀
©一九七七年〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集　第七巻

晶文社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

長谷川四郎全集第七巻・目次

1 ベルリン一九六〇

ポートサイドにて 9

家具の年齢 24

夜中から朝まで 45

反共主義 65

土曜日の夜の鐘 89

ハンス・ガイツケ 116

ベルリン一九六〇補遺 131

ベルリンのNHKシンフォニー ボンド族

2 ベルリン通信

ベルリンの映画 149

ヤポノロギーとシノロギー 152

壁抜けの名人 154

柵の中 157

記録映画『わが闘争』を見る
カウフマン会見記 178
ヴィリー・クレスマン 181
パリへの団体旅行 184
あざみはたわむれに咲く 188
物を書く労働者 191
アドルフ・アイヒマン 194
ウンタ・デン・リンデン 196

3

史上最大の土木工事 209
海員手帳 214

4

二つに割れば倍になる 231
十円オペラ 249
作者のノート・7 281
解題 福島紀幸 290

1　ベルリン一九六〇

ポートサイドにて

コイナさん曰く――余はA市よりB市を好む。A市は余を食卓にまねきたるも、B市は炊事場へ案内したれば也。
――ブレヒト

ベルリンはいつまでも寒かった。五月になっても冬の外套をぬぐわけにいかなかった。あるベルリン人は、今年はとくべつだ、と言ったし、あるベルリン人は、毎年こんなものですよ、と言った。東ベルリンの新聞と西ベルリンの新聞は、和解しがたき東西の矛盾をそのまま反映し対立しているのだが、天気予報だけは一致して、あすはきょうより親切、などと書いてあった。夏になっても、あんまりよくはなかった。ベルリンは湖に富んだ町だが、その水浴場もそんなに繁昌することなく、秋にはいってしまった。九月にわたしはパリやロンドンへゆき、またベルリンへ帰ってきてみると、十月のベルリンは、ほとんど毎日のように雨がふった。老女の夏――とドイツ人の命名した小春日和は、ほんの三四日しかなかった。こんなことはめずらしい、十月は静かな晴れた日がつづいて、木の葉の落ちる音がよく聞こえるのだが、と友だちのドイツ人が言った。

木の葉は一夜のうちにどっさり落ちていたが、その落ちる音は雨に消されて聞こえなかった。友だちがさらにつづけて言うのに――このぶんだと、十一月はきっといいですよ。

しかし、わたしは十一月の二日、雨のふるツォー駅から汽車で、これまた雨のふるブレーメンへゆき、そこから船でアジア航路の終着駅ヨコハマへかえってきた。

ブレーメンの船会社の旅客課は天井の高い大きな部屋であって、中央が待合室のようになっていたが、そこのソファには誰も腰かけていなかった。窓のないつきあたりの広々とした壁はぎっしりと書類綴でおおわれていた。百年以来の船客名簿がきちんと整理され、つめこまれていたのだろう。しかし旅客課の人はこう言った――客は今のところあなたひとりだけです。カイロ、というのはつまり、ポートサイドから、キプロス島うまれの一婦人が乗ってくるかも知れません、たぶんね。

ブレーメンから北海を南下して英仏海峡をすぎビスケー湾にさしかかると、海がひどく荒れてきた。風向きの関係と海が浅いためです、とスチュアドが説明した。そういえば、ベルリンを出発するとき、わたしの友人は――ビスケー湾をゆくわけだね、あそこはちょうど荒れる時期に入っているよ、と言って、船酔いの薬をくれた。しかし海の荒れ工合が足りなかったせいか、わたしが船に強いせいか、おそらくは両者がよく釣合ったせいだろう、わたしは薬の存在を忘れ、かれの親切を無にしてしまった。

途中ずっと暗い陰うつな、うすら寒い、雨もよいの天気がつづ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いていたが、ジブラルタルの岬をかわして地中海に入ると、空は晴れ、あたたかく、空気がすんでいて、夜は星が大きく見えた。白い薄いモヤのような雲が夜空の一半にかかると、その部分をすかして、星が他の一半の星よりもさらに大きく見えた。

地中海がおわって、船がポートサイドに入りかけたとき、早くも水先案内がベルリンの友だちからわたしにあてた、船会社気付の航空便をもってきてくれた。そのところどころ、ここに抜き書きしてみよう——ベルリンはあいかわらず雨がふって、陰うつな天気がつづいている。……ブレーメンからの手紙で、きみは〈猫を袋からとり出す〉と書いてきたが、あれは〈猫をして袋からとび出させる〉と書くべきだ。……船客はきみひとりだけだそうだね。……乗組員と仲よくなったかい？　……船客殿下よ、飲み且つ食い、そして寝たまえ——。

*

わたしは元来がゆきあたりばったりの性分だけれども、東京からベルリンへゆくとき、むこうにいるドイツ人のペンフレンドに到着の日と時刻を通知しておいたし、さらにまた、その友人から或るホテルのアドレスを知らせてもらい、電報で部屋を予約しておいた。北極まわりのハンブルク経由で、西ベルリンのテンペルホーフ空港についたのは、予定通り三月三十日の午後十一時半だった。

フランスの週刊誌「パリ・マッチ」のレーモン・カルチエは、東ベルリンと西ベルリンの相違は、夜に飛行機から見おろすと、よくわかる。前者は暗く後者は明るい。これがまた、東欧圏と西欧圏の相違でもあると、書いている。初めてハンブルクから夜のベルリンの上空にとんできたとき、わたしは眼下にいずこも同じ点々と電燈のまたたいているのをみとめただけであって、東西の明暗度はわからなかった。あとになって夜の東西ベルリンを散歩しながら、おそらく上空から見たならば、レーモン・カルチエ氏の見たごとく見えるだろうと想像しただけである。しかし考えてみれば、西ベルリンは年々、ボン政府からの（ということは、アメリカからのということだ）莫大な援助でどうやら存在している消費都市であって、もしこの給水が断たれるならば、その明るさは急速に暗くなってゆくだろう。それから、またぞろ明るくなるだろう。そして、やがて、東西の区別なく、おしなべて同じ明るさになるだろう——という、これがフルシチョフ・ウルブリヒト提唱にかかる西ベルリン自由都市化案の、空から見た想像図である。

地上に橋はかずかずござる、ベルリン名物〈空の橋〉——とでも訳すべき言葉が西ベルリンにある。もし西ベルリンがソビエト軍によって再び封鎖されるならば、飛行機だけが西ドイツと西ベルリンの〈かけ橋〉になってしまうからだ。言語内容は万国相通ずるものがある。わが国でも〈かけはしの〉といえば〈危うし〉の枕言葉だ。

＊

ところで、テンペルホーフ空港についたとき、友だちは迎えにきていなかった。いっしょにおりた人々のあとにくっついて、地下道のようなところを通り、街路の方へ歩いていったら、背後から英語のアナウンスが聞こえた――ミスタ・ハセガワ、事務所へきてください。ひきかえして、窓口に出頭すると、一枚の紙片をくれた。こう書いてある――用があって飛行機の到着まで待つわけにいかぬ。そのかわり、あしたはQがきみをホテルに訪ね、あさってはVがゆくはずだ。そのつもりでいてくれ。ぼくはこれからロストクへゆき、一ヵ月ほどかえらない。きみのL。

タキシをひろい、ホテルへいった。遠いですか、ときいたら、遠くない、と運転手が答えた。そのうちにタキシは街燈で明るい大通りを走り、映画館に「ヒロシマ・モナムール」の看板がでていた。ここはどこですか。クアフュルステンダム。やがて角を曲り少しいったところにめざすホテルがあった。そのあたりは街燈もまばらで暗かった。かれこれ十二時をまわっていたが、電報をうっておいたおかげで、おお、あんたがトーキョーのハセガワさんか、というわけで、すぐ部屋にありついたが、その部屋に入ったわたしはさっそくぶつぶつ言った――こんな大きい部屋はいらない。ダブルベッドはけっこうだが、ごらんのとおり、わたしはひとりだ。それに、一日二十マルクは高い。すると、ずんぐり肥った主人が答えた――あんたはバスつきの部屋をとっておけと書いたでしょう。バスつきの部屋はここにはこの部屋一つしかありません。あっさり勝負がついて、わたしはわれにもあらず、貴賓室の客になってしまった。

今のこの瞬間において、世界中で、ありとあらゆる旅行者たちが、あっちへいったりこっちへいったりしているだろう。翌朝、わたしは早く起きた。空腹が起きあがらせたのだ。まだ薄暗い食堂で朝のパンをかじっていると、ちょいと粋な黒人の若者が（といって黒人はたいてい小粋だが）入ってきて、隣りの椅子に腰かけた。「おはよう。」きいてみたら、かれは昨夜おそく、フランクフルト経由で、ニューヨークから来たばかりだった。わたし同様、ベルリンは初めてだった。見物かね、ときいてみたら、いや、映画に出るためにきた、と答えた。たぶんエキストラか芸人だったろう。それとも新進のコメディアントであったかもしれぬ。白い歯（といって黒人はみんな歯が白い）をだして笑う愛想のいい若者だったが、ひどく急いでいて、コーヒーもそこそこにとびだしていった。カーテンのすきまから見たら、人けのない朝の街上に小型バスがとまっていて、かれがそれにとびのると、どこかへいってしまった。

黒人といえばベルリンには黒人の学生がかなりいる。西にもいれば東にもいる。西ベルリンの学生寮でパーティがあり、大いにさわいでいたところ、スーダンからやってきた二十四歳のアフリカ人学生と十八歳になるドイツ人の女学生とが口論をおっぱじめ、

ついに黒人青年は白人娘の鼻に噛みついて、損害賠償で六〇〇マルクの罰金か、それとも六十日の拘留のどちらかを求刑された、という記事を読んだことがある。「とてもガマンがならなくなったんです」と、法廷でかれは陳述し、「あの人、すばらしい歯をもってるわ」と、白人娘は証言していたが、なるほど、彼女はそれを知っているにちがいない。黒人青年はその歯をむきだして、はなはだ魅力ある微笑を浮べ、罰金よりも拘留を選んだということだ。そうかと思うと、東ベルリンの新聞には、ライプツィヒ大学の民族学部にアフリカ人学生の第一号が入学し、この人は将来、祖国アフリカにおける民族学のために大いにはたらくことになろう、などと書いてある。

*

戦争のあとはいたるところにころがっている。わたしが西ベルリンで最初に泊ったこのホテルにも、それはあった。ここには女中は一人しかおらず、五十年輩の田舎ふうの服装をした人だった。朝の掃除にきたとき、わたしは彼女に——子供がいますか、ときいた。娘がひとり、郵便局につとめている、と彼女は答えた。配達ですか、とさらにわたしはきいた。ベルリンの郵便配達には女の人が少なくない。おりしも窓の下を一人の若い女がもじゃもじゃの髪に制帽をのせ、制服をきて、手紙でふくれた鞄をかけて、すたすたと歩いていた。いいえ、事務所ではたらいています、と母親が答えた。あなたの夫は……、とわたしはさらにききかけて、彼女が洗面台に水を流す音をきいた。彼女は答えなかった。わたしはまた質問した——娘ひとりきりですか。すると母親はくるりとこちらをむき、肩をすくめてみせた——わたしの夫は戦争へいって、そして帰ってきました。子供はひとりだけで……。ここまで言って、あとは言わず、彼女は水にぬれた赤い手で、下半身がめちゃめちゃになって流れてしまったというような身振りをしてみせた。そう、とわたしは言ったきりだった。彼女はその身振りによって、夫婦の不幸と、それから、子供が一人しかいない理由を説明したのである。彼女は笑うと、半分泣いているような顔になった。ずっとあとになって、わたしは彼女がその娘らしい若い女とつれだってクアフュルステンダムを歩いているのに出会った。母親のほうは、ほとんど茶色のブロンドだったが、娘のほうは、ほとんど白いブロンドだった。わたしが「こんにちは」といったら、しばらくわたしの顔をみてから、あなたでしたか、よくおぼえていますね、と言った。わたしはそのホテルに三日しかいなかったのだ。

ホテルの女主人はドイツ人でなく、スコットランド人だった。Rの巻舌の猛烈にひびく英語を話した。再婚者であって、前の夫は海軍士官で戦死したと言っていた。戦争中、上海にいたことがあり、そこで数名の日本海軍の士官と交際したといい、たちどころに幾つかの、タケラモ・ニトベ式の日本名をあげ——ご存知ありませんか、と無理な質問をした。彼女の夫、つまりホテルの主

人は、もと造船技師で、レーニングラードにいたことがあり、ロシヤ語を知っていた。「ベルリンはどのようにあんたの気にいったか」と、ロシヤ語で言った。かれの首筋は赤く丸々とふとっており、わたしはそれを見ながら、ロシヤ人がドイツ人に〈ドイツ人のソーセージ野郎〉と渾名をつけていることを思いだし、あやうく口に出かかった。かれは食堂兼事務室の隅っこで、ラジオをひじょうにひくくかけ、耳をぴたりとそれにあてて、西ベルリン市長ヴィリ・ブラントの演説をきいていた。そして――ブラントはまったく賢明な人間だ、と言っていた。これでみると、かれは典型的なよき西ベルリン市民だったろう。わたしが――東ベルリンにいって住むつもりだ、と言ったら、それはいいことだ、すべてを見る必要がある、経験があんたにおしえるだろう、と言った。

*

昨夜おそく到着したばかりで、西も東もわからない。Qという人物が訪ねてくるというので、遠くへ出かけるわけにもいかない。わたしは「デア・ターゲスシュピーゲル」という新聞を買ってきて読んだ。東ドイツにおける農村の強制的コルホーズ化のため、東から西への農民の逃亡が続出、という記事がでかでかと出ている。農民にもいろいろある。土地貴族も農民なのだ。論説をよむと、コルホーズ化もよかろう、しかし強制はいけない、というのである。これはすでに飛行機の中で読んだドイツ新聞「世界」紙にも出ていたことだった。

わたしの待っているQという人物に、わたしは面識こそなかったが、Lを通じて名前は知っていたし、著書も読んだことがある。終戦後、西ドイツから東ドイツへ移り、その市民権を得て、今は東ベルリンに住んでいる人である。かれがまずわたしを東ベルリンへ案内してくれるだろう。待っている者に日は長かった。

ようやく夕暮になって、廊下で主人の声がした。一人の紳士があなたのところに来ましたよ。ノックの音。戸がひらいて、暗い所に背の高い男がソフト帽をかぶり、長い外套を着て立っていた。Qが入って来た。同時にゼイゼイいう微かな呼吸の音がきこえた。ゼンソク持ちなのである。

Qはもと第三国家の外交官をつとめたことがあり、フランス語と英語を自由に話した。第一次世界大戦には若き騎兵少尉として出征したという。六呎からの長身である。かれにつれられて、わたしはツォー駅からフリードリヒシュトラーセの駅へいった。前者をビジネスセンターとすれば、後者は官庁街である。そして前者は西であり、後者は東である。

このフリードリヒシュトラーセの駅のすぐそばに記者クラブの建物があり、その三階のレストランで、わたしはQの話をきいた。

まず東は暗く西は明るいということについて。

そう、東ベルリンはたしかに暗く、西ベルリンにみられるような華やかさはないが、これはしかし、われわれが自力で自分の地面の中から生成発展しようとしているからである。

しかし、東から西への農民の逃亡がふえているそうですね。
そう、それは事実だ。しかし、そういう連中は私有財産や金利生活に恋々たる人たちであり、逃げるのは仕方ないでしょう。
西側の新聞は、東には言論の自由がないと書きたてていますよ。
そう、しかしかれらのいう自由とはなにか。西ベルリンのシュプリンガー画廊などへいってみたまえ。わけのわからないアブストラクトの絵がかざってある。あんなものを発表する自由はなくてもいっこうさしつかえないね。
Qとの初対面はこのような公式インタヴューみたいなことでおわった。かれの言ったことはすべてこれ、東側の公式的意見だった。しかしQはもと男爵の称号をもつ郷士（ユンカー）の出身であって、その領地はベルリンから遠くない東ドイツ内にあるのだが、これも今はコルホーズ的に組織されており、かつてのかれの小作人たちが、その土地を管理しているということである。
それらの百姓たちがいかに知的な能力をもっているか、おどろくべきものがある、とQは言った。
その口吻には力と熱がこもっていた。イデアリストである。鷲鼻の高い横顔。老いたる独身者。いかにも簡素な生活をしているようで、ビールも飲まずリンゴのジュースと少量の野菜を食べただけだった。

*

その翌日、Vが訪ねてきた。——昨晩、Qに会いましたよ、と言ったら、VはQの名前だけ知っていた。そして言うのに
——きみ、Qは戦後アメリカから帰ってきたが、西ドイツ政府から年金をもらえなかったんだ、戦争末期にはナチの官吏をやめていたからね、それで東ドイツへいってしまったんだ、ちょいと早まったね、手続きをとって提訴すれば貰えたんだ、そうしたら、東へはいかなかったろうさ、東だって、このかんの事情はちゃんと知っている、知っていて利用してるんだ、Qはナチ外交の内幕を少しは知っているからね、大した人物ではないが、西への見せびらかしにもなるからね。
いかにも事もなげな調子だった。たぶん、そういう事情もあったろう。要するに、人間は複合体である。
Vという人物については、なんらの予備知識なく、初めて会ったのだが、西ベルリンに住んでいる、あんまり金まわりのよくないインテリであって、中国語ができた。ラジオの時事解説で中国問題にかんする原稿を書いているということで、国連は中共の加盟を認むべし、という論文を発表したこともあるそうだ。文学芸術にも興味があり、文学はつまるところ形式や文体の問題だ、と言っていた。そして、自分はある中国の小説をドイツ語に訳したが、原文は立派なものであるけれど、訳はくだらないナンセンスになってしまった、と自分の仕事を例にあげた。Vは皮肉な、おもしろい人物だった。それほど熱心に話すのでもないのに、顔をつきだし、ツバキをとばして、わたしの顔にひっかけ、平気な顔

をしていた。

Vは東ドイツ政府にたいして敵意をいだいていたが、しょっちゅう東ベルリンへでかけていった。それというのも、「人民日報」など中国の新聞雑誌を手に入れ、メシのタネにするためだった。中国語の新聞を書きこみでまっくろにして、この略字はなんと読むのかね、などとわたしにきいたが、わたしにもわからなかった。——百花斉放は失敗だね、いろんな意見がでて、あぶないですよ、なんて言っていた。それから、中国のある有名な老歴史学者がそれまで黙っていたのだが、急に教条的マルクス主義に異議をとなえ、ためにケンケンゴウゴウの非難をうけている、おもしろいものだね、黙っていれば尊敬をうけていたのに、急にデモンにとりつかれ、老いたる身体があぶなくなるのだ、首のかたい老人で、なかなか負けていないんだ、などと言った。そして後で、それについて自分の書いた新聞記事を——なに、くだらない文章ですよ、と言いながらわたしにみせてくれた。

*

その後、わたしはVと一しょに東ベルリンのウンタ・デン・リンデンにある国立図書館の食堂へ出かけていった。東西マルクのサヤをかせぎ、ここで安くメシを食おうというわけだった。壁には〈要求されるまでもなく、身分証明書をみせろ〉という貼紙がしてあったが、そんなもの、要求もされなければ、見せようにも持っていなかったのだが、悠々とメシをくい、ビールをのむことができた。ここは〈閉ざされた世界〉だからね、とVが説明した。西ベルリンの市民たちは東ベルリンへきて買物もできなければレストランへも入れない。だが、劇場や映画館には自由に入れる。そして一たん入ってしまうと、東西の区別がなくなり、場内の食堂へも身分証明書なしに入れるのだ。図書館もそういう世界に属していた。ほんとうはこれも禁じられているのだが、黙認されているのだ、とVが言った。この食堂にはたくさんの西ベルリンの学生がきているということだった。見渡して、どれが西ベルリンの学生か、ときいてみたら——服装のいいのがそうさ、とVが事もなげに言ったが、わたしにはその区別がつかなかった。

この食堂へわたしはひとりで毎日のようにでかけていったが、そのうち、そこへくる常連の一人である中国人の学生と知りあいになった。かれは、ドイツ人かと思われるほどドイツ語のうまい英国人の学生といつも一しょだった。あるとき一つのテーブルについて、二人の話をきいていると——あそこにいる娘にきみは話しかけることができるかね、と英国人が言い、できるとも、と中国人が答えた。そしてすぐ立ちあがって、その知らない娘のテーブルにゆき、初めは立ってなにやら言っていたが、やがて坐りこんで話し、またもどってきて——あの娘はポーランド人で東ベルリンへ留学にきているんだ、ぼくらのテーブルへきたそうだったが、そばにくっついているオバさんがダメなんだ、と言った。英国人は笑いながら親指でその友人をさしながら——この人の奥さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com